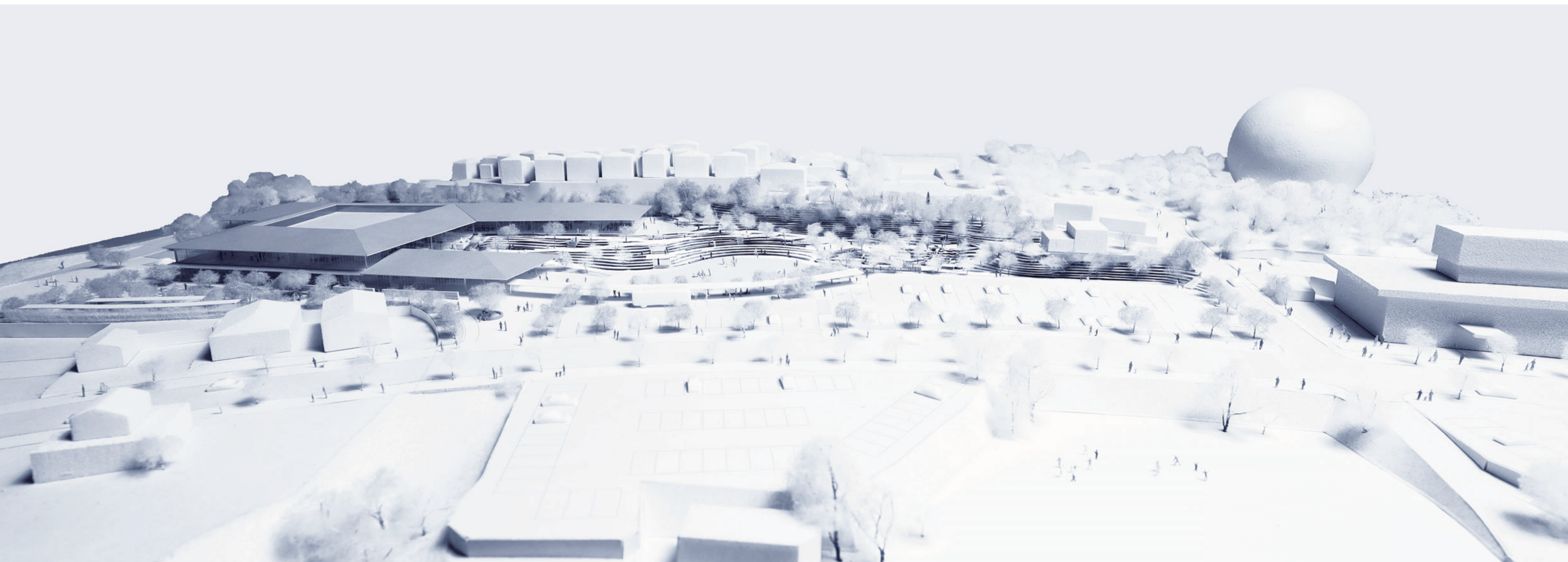




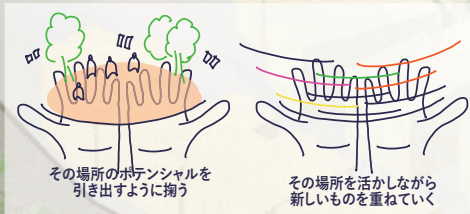
プラットフォーム

明様なアクティビティが重なる器

今熊地区周辺エリア複合施設整備事業

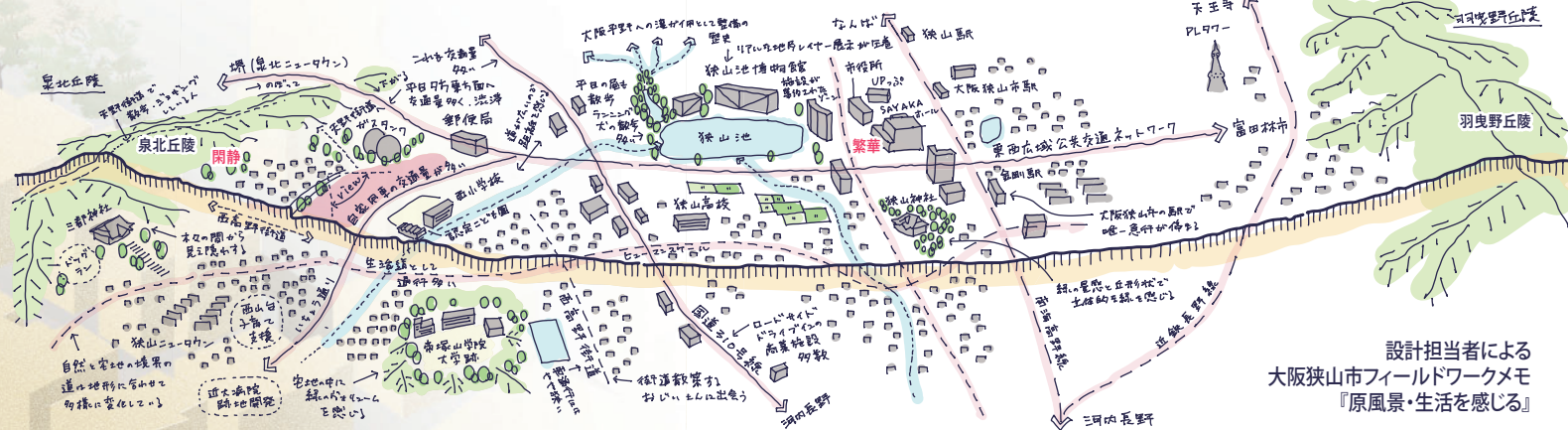
多様なアクティビティが重なる器

大阪狭山市に既にあるポテンシャルを活かすように『生活』や『歴史』や『地勢』に耳を澄ませ
積み重なる地層がレイヤー状に重なるように、新たな活動や賑わいが重なる居場所をつくります



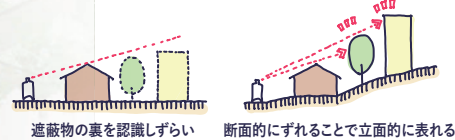
03// 大阪狭山市の微地形による地勢の豊かさ // らしさの抽出

東の羽曳野丘陵と西の泉北丘陵に『挟まれた地』であることに由来される大阪狭山市は、緩やかに勾配を持った微地形によって見下ろすと眺望が、見上げると立体的な街や緑の量感を感じることができる、多様で豊かな街です。



見上げの豊かさ

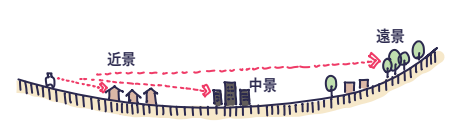
豊かな自然と生活が重なりあいながら、変化のある立体的で多様な表情があります。ヒューマンスケールで生活感のある街路は穏やかで親密な景観を形成しています。



緑と生活が立体的に重なる

見下ろしの豊かさ

お椀型の微地形によって、多様な街の様相を俯瞰できます。丘陵を超えてアプローチする時に見える緩やかに囲まれたこの景観は大阪狭山市の原風景を感じさせます。



多様な街の様相が重なる

04// 大阪狭山市の景観に連続する在り方 // 地形に寄り添う『ひな壇配置』

地形に寄り添う『ひな壇配置』

特徴的な微地形を活かし、ボリュームを分散させ、地形に寄り添うように建物を配置することで、敷地東側や西側の戸建て住宅に配慮します。

緑と生活が重なる // 見上げの豊かさ

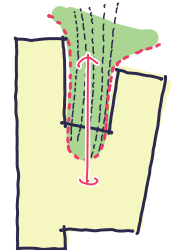
緑と生活が近くにある大阪狭山市の特徴的な景観を踏襲し、建物の間にも樹木を配置し建物と外構の親密な関係を感じられる構成とします。

アクティビティとマチの重なり // 見下ろしの豊かさ

ひな壇状に配置することで東を望むと、本敷地内で展開される近景のアクティビティ、生活感を感じる中景、遠景に広がる羽曳野丘陵の山並みとが重なり合う、大阪狭山市らしい景観をつくります。

中にも繋がるさやまの地形

ひな壇配置の間に生まれる丘状の地形（さやまの丘）を内部まで連続させることで、屋外の豊かな重なりが内部までシームレスに繋がります。



平面的に地形が貫入する

01// 大阪狭山市の魅力をさらに高めるサードプレイス

利便性と豊かな自然に恵まれた住みやすいマチ

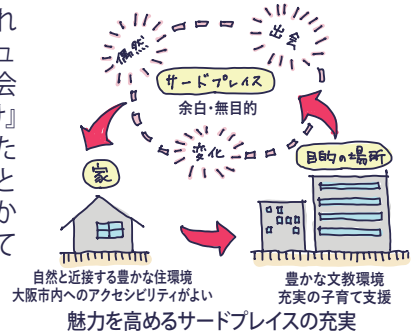
大阪市内へアクセスしやすい利便性と豊かな自然に恵まれた、住みやすいまち大阪狭山市。周辺の市内外には高校・大学など、豊かな文教環境にも恵まれ、子育て世代にも選ばれるまち。既に多くの施設があり、目的の決まった施設は充足している印象があります。

目的が無くてもにっこせるサードプレイス

そんな充実した貢市の魅力をさらに高める施設として、『用事がなくても』、『散歩の寄り道に』、『何かのついでに』など、目的を持たなくても過ごせるようなサードプレイスを提案します。

ゆるやかなコミュニティで生まれるやわらかい交流

無目的だからこそ生まれるゆるっと繋がるコミュニティで『予期せぬ出会い』や『偶然のきっかけ』や『日常のちょっとした変化』などの、いつもと少しだけ違う、やわらかい交流が自然と生まれていきます。



02// フトコロの深い器で市民の様々なニーズを受け止める

みんなを受け止める深いフトコロ

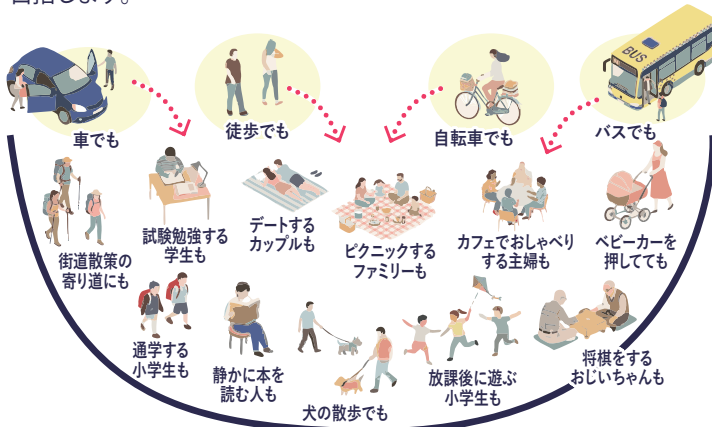
敷地周辺には犬の散歩をする人や街道を散策する人がいます。まずは立ち寄りやすく、様々な人や多様な活動を受け止めるフトコロの深い施設を目指します。

アクセシビリティへの配慮

世代ごとに移動手段も異なります。誰もがアクセスしやすい細やかなアプローチの設計で、訪れやすい施設とします。

様々なアクティビティの共存

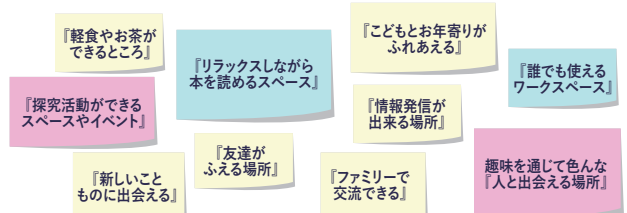
各機能の距離感を丁寧に設計します。離すことで安心できる環境をつくったり、共有することで出会いのきっかけをつくったり、場の特性に合わせた計画とします。



誰でも来てもいい場所・誰でも来やすい場所

細かなニーズにも応える共用部の充実

専用室が必要な機能を精査し、共用部で実現可能なアクティビティをふくませます（右図参照）。共用部の充実には多様なアクティビティが重なる豊かな居場所となります。



基本構想ワークショップでの市民意見抜粋『共用部でできること』

自然と生活が近接する里山の豊かさを活かした、みんなの居場所を提案します

計画敷地は、ニュータウン開発によって整理された『整えられた街並み』と『豊かな自然』が重なる境界域にあります。
敷地周辺を散策すると、その境界域には『整備された区画』と『自然の無造作』がぶつかるところで、いきなり曲がったり、見通せなかったり、回り込んだり、アルコブ状だったり、と多様な変化が生まれています。この場所の特徴を取り入れた多様な居場所をつくり、市民のみんなのサードプレイスとなることを目指します。

01// ヒューマンスケールと立体的な緑 生活感を敷地内に感じる

計画地は泉北丘陵の北側先端、東側傾斜地形の中腹に立地しています。既存の各施設のスケールは小さく、その合間には緑量豊かな植栽が展開され、生活道としても使われている敷地内通路がいくつかあります。

地形に沿って寄り添うように佇む建物群や通路は、大阪狭山市らしいヒューマンスケールと立体的な緑、多様な変化、日常と地続きにある居場所であることが感じられます。

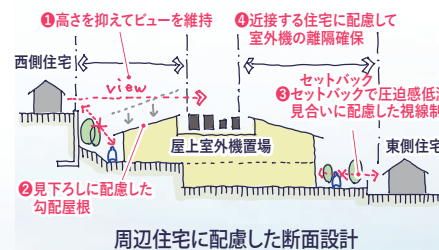
地形に対して素直に建てることで生まれる、多様さを内包した既存施設の佇まいの継承が望ましいと考えます。



大阪狭山市の魅力が現れる断片

03// 周辺住宅に配慮した断面設計

- ①西側の住宅に対して、東に拡がるビューを維持します。
 - ②見下ろしに配慮して高さを抑えた勾配屋根とします。
 - ③敷地境界から建物をセットバックし、圧迫感低減を図るとともに、見合いに配慮して開口部を制御し、緩衝緑地を設けます。
 - ④施設の設備騒音に配慮して建物中央部に近接住宅から十分な離隔を確保した室外機置場を設けます。
- ③④によって、外周にも園路を設けることが可能となり、敷地全体が市民の憩いの場となる裏のない計画とします。



周辺住宅に配慮した断面設計

02// 機能的なゾーニングと既存の緑・ヒューマンスケールの継承

道路を跨ぐ敷地に対して、駐車場ゾーニングを集約させます。

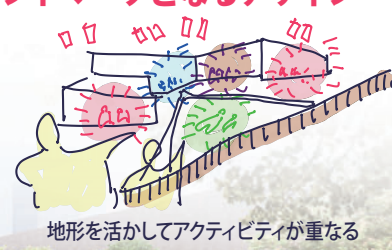
建屋を南にコンパクトにまとめることでみんなで集まれるまとまった広場（みんなの広場）を確保します。

イベントで使える「みんなの広場」と日常に使えるヒューマンスケールの広場をグラデーションに連続させます。



04// アクティビティの重なりがランドマークとなるデザイン

緩やかな傾斜をもった敷地の特性を活かすことで、この場所で展開される様々なアクティビティがひな段状に重なっていきます。建築もアクティビティも、豊かな緑陰の中に見え隠れしながら、地形に寄り添い、穏やかに佇むような表情となります。



地形を活かしてアクティビティが重なる

05// あらゆる方向からのアプローチ

既存施設の敷地内通路を踏襲し、様々な方向からアプローチ可能な計画とします。
最短アプローチによる利便性向上に加えて、寄り道をするように気軽に通り抜けられる道を設けて、出会いのきっかけを生みだします。



06// 渋滞抑制と歩車分離

交通量の多いいちょう通りに対して、回遊性のある駐車場計画とすることで、入場待機による道路での渋滞を抑制します。歩車交錯を回避する歩行者アクセスルートを計画します。



みんなの広場

さやまの丘



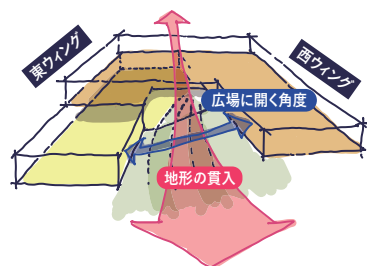
多様なアクティビティの重なるみんなのサードプレイス

01// 内外がシームレスにつながることで敷居が低くなる

透明感のあるファサードとし、建物を広場に対して開きながら、地形をそのまま内部まで連続させることで、より開かれた施設とします。

屋内外のシームレスなつながりによって、屋外の人々を自然に屋内に誘います。

屋内に展開される地形と連続するスキップフロア（本の丘）で活動を滑らかにつなぎ、上階へ、奥へと行ってみたくなる空間構成とします。

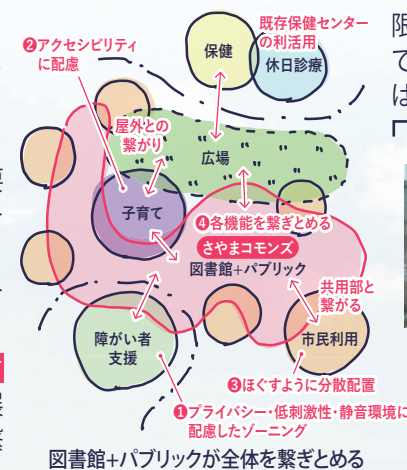


内外が連続することで敷居を下げる

02// 機能的なゾーニングとつながりの両立

多様な機能が複合するに当たり、

- ①障がい者支援のプライバシー・低刺激性・静音環境への配慮や
- ②ベビーカーを押す保護者のアクセシビリティの観点で配慮が必要な子育て支援など、機能的なゾーニングを丁寧に設計します。
- ③分散配置が可能な市民利用諸室をほぐすように分散配置させながら、
- ④図書館や共用部からなる『さやま commons』をゆるやかに展開させることで各機能同士を繋ぎとめます。
-

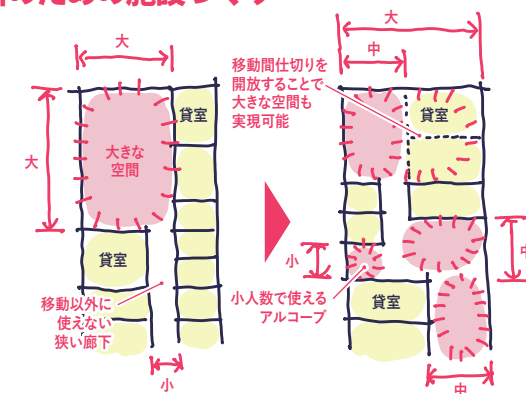


03// 市民の日常の居場所のための施設づくり

大きな会場はイベント時には活用しやすい一方で、日常使いの時にはスケールの小さな空間や、腰掛けられる段差などの掘り所が欲しくなります。

小人数でも集まりやすい小さな居場所を点在させ、市民が落ち着ける拠り所をつくり、日常的な市民ニーズに応えます。

イベント時には移動間仕切りを開放することで大きな空間にも対応します。



象徴としての大きな空間よりも

日常のための小さな居場所

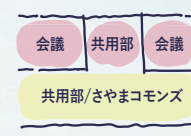
04// 居場所をタイムシェアすることで余すことなく使う

限られた面積の中で全てを使い切るには、施設全体として稼働率をあげることが重要です。共用部（さやま commons）を貸室のように見立てたり、貸室に予約がない時には共用部の拡張として開いたり、施設をフル活用する提案とします。

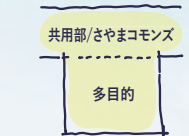
貸室のように機能する共用部

共用部の拡張として振舞う貸室

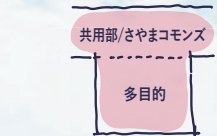
貸室の拡張として機能する共用部



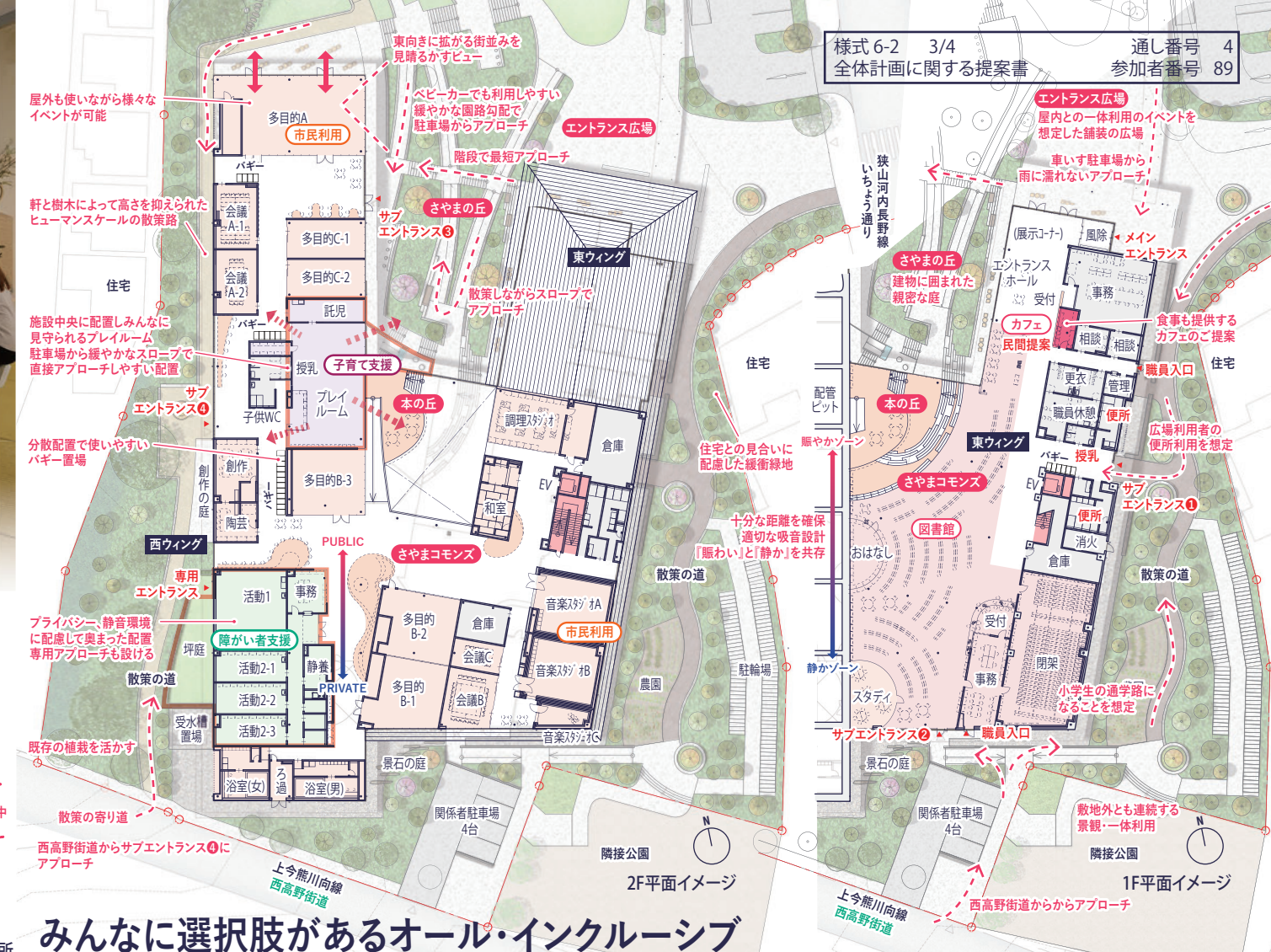
囲まれた場所で過ぐす



共用部の一部と見立てて広く使う



多目的の活動が共用部まで拡がる



みんなに選択肢があるオール・インクルーシブ

01// 『行ける』 だけではないことで感じられる『DE&I』

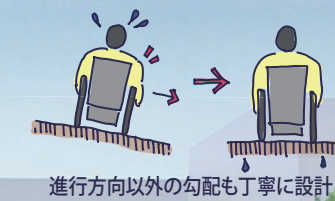
『段差解消用の別ルート』といったバリアフリーの枠組みを超えて、上下階をつなぐ様々な経路を用意することで、誰もが自分のペースで様々な楽しみ、心地よく、充実した時間を過ごせる空間を実現します。

多様な出会いがあり、様々な体験が交わり、意識せずとも自然に交流が広がる広場を目指して、『DE&I』の理念を実現します。

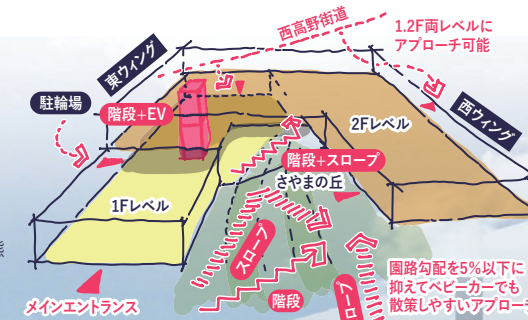
※DE&I（ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン）：多様性とアイデンティティを尊重し、かつ、公平な活躍の機会を与えられている状態

02// 解消可能なバリアは徹底して無くします

車いすの通行は水勾配や歩道切下げ部など、進行方向以外の勾配でもバリアにつながります。透水性舗装による緩勾配化など、各所で丁寧で緻密な検討と対話を重ね、最適解となる園路計画を実現します。



進行方向以外の勾配も丁寧に設計



様々な選択肢のあるアプローチ計画

